

# アトリエ 琉游舎 だより 177号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2024年4月24日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>

## 江戸っ子は五月の鯉の吹き流し 口先ばかりではわたしは無し



- 面白い狂歌を見つけました。前半は落語のまくらにもよく使われるとのことですが、まくらだけ聞くと「江戸っ子は大口叩いて言葉は荒っぽくても、鯉のぼりと同じように腹に一物もなくさっぱりしている」ときっぷの良さを讃えているように見えますが、狂歌となって後半部分が加わると「そうは見えるが、口先ばかりで中身は空っぽ、実がない」とも読めます。
- 鯉のぼりの一番上で五色のひらひらと泳ぐものが吹き流しです。この五色は古代中国から連綿と続く陰陽五行説に基づくものとされています。これは世界は陰と陽の気と木、火、土、金、水の五つの要素で成り立っているという思想です。木は青色、火は赤色、土は黄色、金は白色、水は黒色に通ずるものとされ、万物を形成するこの五要素が、子供を邪気や災いから守ってくれる「お守り」や「魔除け」のような意味合いを持つとされています。
- 田園地帯を車で走ると競うように泳いでいた鯉のぼり、近頃見かけることが少なくなりました。少子化と核家族化で鯉のぼりを揚げる理由も労力もなくなってしまったのか、家庭に退蔵されていた鯉はいつの間にか観光地の川の兩岸を渡して吊るされてしまいました。
- 鯉は風と共に横に泳ぐものと思いましたが、川の鯉のぼりは水面に尻尾を向けてぶら下がっているようにしか見えません、強い風が吹くと少しは泳ぐそぶりを見せるようですが、あまりやる気を感じません。バブル後の失われた30年の象徴のようであり感心しません。
- 川面にぶら下がる元気のない鯉のぼりに比べて、大言壮語、実のない口先ばかりの言葉の波を泳ぎ渡る現代の吹き流しは、我が物顔に私たちの頭上でエラそうに泳いでいます。いつから政治家ははらわたのない言葉をまき散らすようになったのでしょうか。但し、江戸っ子のように腹に一物もなくさっぱりしている政治家では政治が務まらないのかもしれませんが。

### 4月・5月スケジュール

			木	金	土	日
			25	26	27	28
			映画会 お休み			
29	30	5月1日	2	3	4	5
			映画会 お休み			
6	7	8	9	10	11	12
			映画会 13時半から			写経会 13時半から
13	14	15	16	17	18	19
			読書会 13時半から			
20	21	22	23	24	25	26
			映画会 13時半から			

**読書会**  
5/14 (火)  
13時半

**写経会**  
5/12 (日)  
13時半から

**映画会**  
5/9・5/23  
(木) 13時半

朝小鳥の鳴き声で目を覚す季節となりました。小鳥は明るくなるとさえずり始めるので、彼岸から夏至に向かってどんどん日の出が早くなっていくこれからは、今の5時が早くなり4時頃には小鳥に起こされてしまうかと思えばそうでもなく、小鳥の声にいつの間にか慣れてしまい目覚める時間は一定になるはず。そういえば昔線路脇に住んでいたときのこと、最初は始発電車の音で起こされましたが、3日もすれば慣れて目覚ましをかけなければ起きることができなくなったことを思い出します。一日中車が激しく行き交う幹線道路沿いに住んだこともあります。どんなに騒音が激しくても眠くなれば眠り、起きる時間になれば起きることができるようになります。環境に順応できる能力は人の生きる知恵のひとつなのかも知れません。

環境に順応していくための時間も負担も人それぞれです。私は環境が変わってもその変化にあまりストレスを感じることなく、精神的にも肉体的にもアレルギーを起こさないで、変化に対応できてきたのではないかと考えています。逆に自ら環境の変化を求めていくようなところがあるようで、定年前に広告代理店を辞めて、東京から自然豊かな矢板に越して僧侶になったことも、理屈をつければいくらでもつけようがありますが、煎じ詰めれば同じ環境に安閑と安住することが苦手だった言うことかも知れません。どっしりと大地に根を下ろして土地を開墾しゼロから作物を育て上げる農耕民族のタイプよりは、新しいもの（獲物）を求めて、土地から土地へと移動し続ける狩猟民族のDNAが色濃いのでしょうか。このタイプは何かひとつのことをじっくり作り上げることが苦手で、技術者や研究職には向かないことは、私自身が充分承知しています。どんな環境も受け入れ、拒絶しない性格にふさわしいだろうと、私を15年来のクリエイティブ職（広告技術者）から営業職へと異動をさせた当時の上司は、私の適性をよく見抜いていたと今更ながら感心します。

私は今まで狂言綺語の中で、仏の道を歩むことはありのままに観てありのままに行うこと、その道を歩み続けることが安らぎの処（涅槃・悟り）へ向かう行いそのものであり、それが仏になることだと申し上げてきました。またそれは何か特別な難行苦行があるわけではなく、社会生活の中での実践（行）でなければならず、毎日を日々生きることが仏の道を歩むことだと申し上げてきました。つまり仏の道を歩むということは「ありのままに日々を生きる」と言うことです。仏教には数多くの仏の教え（経）が存在し、その教えに依拠した数多くの宗教社会（教団・宗派）が存在します。しかしそれは仏教の教えの本質である、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜、一切皆苦の四法印から派生したそれぞれの枝葉の部分です。私は今あるそれらの枝葉の部分から仏の道を歩むのではなく、今現在の私の「生」に必然となる教えの本質から始まる仏の道を歩まなければなりません。私自身の仏の道は四法印から今この瞬間も成長し伸び続ける私の枝葉です。その枝葉が私の「ありのままに生きる」ということです。私は人それぞれにありのままがあると思っています。人それぞれのありのままがあれば人それぞれの仏の道があります。つまり人それぞれの「生きる」があるのです。仏の道は宗教社会の中ではなく、「生」を生きる私たちの生活社会の中にあります。人には各々の生活があるように、各々の仏の道があります。仏教の究極が個人的なものであると考える理由はこのことです。

私はどちらかというといろいろなものに順応性がある方だと前半で述べてきました。私の考える仏の道は一見すると既存の宗教社会に順応していない異端の道に見えるかも知れません。それは私がかつてお釈迦様がこう語ったや日蓮聖人がこう述べたと言うことに全く重きを置いていないからなのでしょう。なぜならそれらは彼らの時代の社会状況と個人の経験と思惟によって述べられた言葉だからです。私は彼らの言葉に依るのではなく、実践した「行」とその原動力となった「信」を私の生きる社会と私の経験と知識に立脚して我が身に引き当て歩むことが私の仏の道だと考えます。そしてこれが私の仏教者としての順応のあり方です。

「順応」はある環境に「慣れる」に従ってそこに馴染み習熟することですから、社会生活だけでなくある特定社会（党派・宗派・会社など）の中で自分なりの場所を確保するには重要な能力でしょう。しかし「慣れる」ことに従順で盲目的になると「慣れる」が「馴れる」に容易に変化し馴れ合いの関係が生じるのではないのでしょうか。そこからはなあなあの無批判な集団意識が生まれ、ひいては社会と個人が相互依存や支配関係となり、利害や権力構造に組み込まれてしまう危険性があります。社会と個人が馴れ馴れしく振る舞えばその社会の外にいる人には、そこは閉鎖的で保守的な所に見えるでしょう。実際そこに馴れることができない人や馴れたくない人はその社会から排除されてしまうはず。社会の分断、二分化の始まりです。今の日本の社会は政治や経済だけでなくあらゆるものが二者択一、賛成か反対か、敵か味方かの2つのカテゴリーに分断されてしまっているような気がします。それはある社会に同化して自らをそこに没入させてしまうことの居心地の良さに安住してしまえば、何も考えず、何も行わずに日々を過ごすことが可能だからなのでしょう。しかしそれは「順応」ではなく「従属」です。ありのままに生きることの極北にある毎日です。

ありのままに観ることは自分の五感と精神を総動員して観ることで、他者のそれに追随することではありません。観る私が全てに渡って自由でなければ、ありのままに観ることができません。それを法華経観世音菩薩普門品第25では「遊此娑婆世界（この娑婆世界を自由に遊ぶ）」と説いています。そこではあらゆる社会の現実に順応して菩薩の道を実践した姿が書かれています。仏教が社会の環境や境遇に順応して、日蓮聖人の願いである娑婆即寂光土（私たちの生活の場がそのまま安らぎのところ）の実現に向かって歩き続けるためには、あらゆる社会を自由に「遊ぶ」順応の精神から歩みを始めなければならないのではないかと、早朝の小鳥のさえずりを聞きながらあらためて思い至った次第です。